

『黒漆雲龍螺鈿盆』修理報告

佐久本純¹ 土井菜々子²

I. はじめに

本資料は、一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵の『黒漆雲龍螺鈿盆』である。

令和4年5月9日より令和5年3月28日まで沖縄県立博物館・美術館修理修復室内の琉球漆工藝舎にて修復が行われた。修復にあたっては、佐久本純を担当職員とし、土井菜々子を修復責任者兼担当者とした。

II. 修理報告

1. 名称

黒漆雲龍螺鈿盆 (No. 193)



1. 員数・法量(mm)

一枚 高さ 41 径 349

2. 資料概要

総体黒漆塗。湾曲した鍔をもつ円形の大盆。低い高台を付す。17世紀から18世紀にかけて中国への進貢品として盛んに制作されたものと同じ様式の盆である。見込み部分には火炎宝珠を中心にして五つの爪を持つ双龍と雲を、鍔には亀甲花菱文で四つに仕切った内に、団扇、巻物、払子、羽扇の吉祥文を配し、枠外に亀甲花菱紋をそれぞれ螺鈿で表す。

¹ 一般財団法人 沖縄美ら島財団 総合研究センター 琉球文化財研究室 琉球文化財研究係 主事

² 琉球漆工藝舎 代表

3. 損傷状態

火災により貼りついた薄葉紙の紙繊維が盆全体に残る(図1)。特に見込や鏝の一部は、繊維の付着が強く、水による拭上げでは、除去できないほどである。また、薄葉紙が付着しなかった部分は滲出したと考えられる油滴のような跡が数箇所に見られる(図2)。



図 1-1 見込み 薄葉紙の紙繊維



図 1-2 鏝部外面 薄葉紙の紙繊維



図 2 油滴のような跡

螺鈿の部分に空気の混入が多く見られたため、今後、剥離の危険性が考えられる(図3-1)。火災による滲出と思われる茶色い汚れが、鏝の一部に広く被さっており、螺鈿が茶色く変色したように映る(図3-2, 3-3)。



図 3-1 空気が混入している白い部分



図 3-2 螺鈿に被さる汚れ



図 3-3 茶色い汚れが見られない箇所

鍔部に大きな損傷が見られる。外側には、弧を描くように10cm程の亀裂が入り、内側は1cm程の亀裂にとどまる。縁には一箇所、塗膜の剥落があり木地が露出している。(図4-1, 4-2)。



図4-1 鍔の亀裂



図4-2 鍔の亀裂

高台に一箇所、壁掛け用の穴が開けられている(図5)。壁に掛けた際に上部にあたる鍔外面は艶が失われてマットな質感になっていた(図6)。



図5 高台に開けられた穴



図6 マットな質感の鍔外面

高台の木地接合部に亀裂が生じ、周辺の塗膜が剥落している(図7)。また、高台の口縁は使用によるものと思われる塗膜の損傷が、一周にわたって見られる(図8)。



図7 高台の亀裂



図8 高台縁の塗膜剥落

4. 修理原則

現在、我が国で行われている指定文化財漆工芸品の保存修理に則り、現状保存修理を原則として行う事とする。修理に際しては、十分に事前調査を行い、傷み等の現状を確認した上で修理工程を決定する。また、写真撮影を伴った修理の記録を取り、修理後と比較できるようにし、修理終了後報告書を作成し提出する。

5. 作業方針

火災により貼りついた薄葉紙の付着跡、油滴のようなシミは、可能な範囲でクリーニングを行い、火災前の状態に近づける。急激な塗膜劣化に対してより丁寧な塗膜の強化を行い、火災前の状態に近づける。

本資料の令和4年度における作業は、後述の修理工程①から⑤までとする(第一年次)。

6. 修理工程(令和4年度実施)

- ①修理前写真撮影、調査
- ②クリーニング
- ③螺鈿押さえ
- ④亀裂補強、塗膜押さえ
- ⑤報告書作成

7. 修理内容(第一年次)

はじめに修理後との比較ができるよう、修理前撮影および現状調査を行った。クリーニングは、精製水で湿らせた綿布を使用して、薄用紙が付着した跡に残る紙繊維を除去した。作品の表面に滲出しているシミ(薄用紙が付着した箇所や油滴のような跡)に精製水やエタノール水溶(60~70W/V%)を用いてクリーニングを試みた。これは、効果が見られなかったため、油脂の除去に効果がある弱アルカリ性の重曹水(3~5W/V%)を使用したところシミの除去に一定の効果が見られた(図9-1, 9-2)。重曹水でクリーニングを行なう際は、汚れの物質と混合することで生まれる塩を資料表面に残留させないため、重曹水を用いた後に精製水での十分な拭き取りを行なった。



図9-1 重曹水によるクリーニング



図9-2 重曹水によるクリーニング

鏝縁に一箇所、過去の修理によると思われるパテ材が付着していたため、細心の注意をはらい刃物を用いて除去した(図 10-1, 10-2)。



図 10-1 付着物



図 10-2 除去作業

高台部分に開けられた穴を塞ぐように下地のようなものが詰められていた。旧修理の際に埋められたものと考えられるため、これは取り除くことにした(図 11-1, 11-2)。



図 11-1 下地が埋められた部分



図 11-2 除去後

螺鈿は所々に気泡が見られ、部分的に貝の浮きが生じているため、膠液での接着を試みた。貝は、気泡の周辺が塗膜と密着していたため膠液が入り込める隙間が無く、螺鈿の押さえは、含浸が可能な部分のみに留めた(図 12-1, 12-2)。



図 12-1 膠液含浸



図 12-2 膠液含浸

高台の木地接合部に生じる亀裂とその周辺塗膜の浮きを押さえるため、下地が露出している部分に前処置として生漆を染み込ませ、補強した。漆が乾く間に、各修理部分の形状に合わせて木型を作り、アクリル板や塩化ビニルシートを合わせた治具を作成した。接着は、亀裂部分に接着用に調合した麦漆を溶剤で希釈して、複数回に分けて流し込み、溶剤が揮発して、麦漆に粘度が出てきたことを確認したのちクランプによる押さえを行なった(図 13-1、13-2)。



図 13-1 麦漆含浸



図 13-2 クランプによる押さえ

鍔縁に生じる亀裂部分にも同様の押さえ作業を行った(図 14-1、14-2、14-3、14-4)。



図 14-1 木地亀裂部



図 14-2 木地亀裂麦漆含浸



図 14-3 塗膜下麦漆含浸

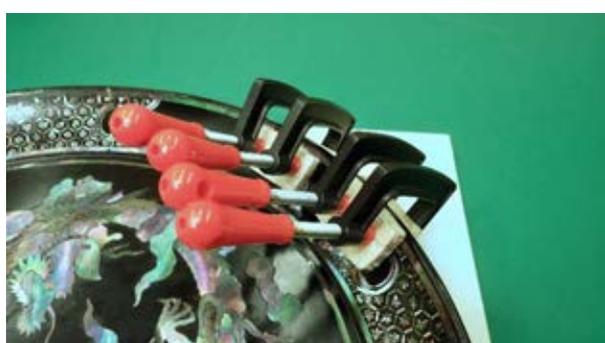


図 14-4 クランプによる押さえ

見込みと鍔との接合部や高台の接合部に生じる亀裂にも麦漆を合浸し、木地構造を補強した(図

15-1, 15-2)。



図 15-1 麦漆含浸



図 15-2 麦漆含浸

当該資料は2ヵ年による修理のため、第一年次(令和4年度)の処置は以上とする。

8. 修理場所

沖縄県立博物館・美術館内修理修復室

9. 修理期間

令和4年5月9日～令和5年3月28日

修理前修理後写真(第一年次)



全景 クリーニング前



全景 クリーニング後



見込み クリーニング前



見込み クリーニング後



鍔裏 クリーニング前



鍔裏 クリーニング後



鍔部木地亀裂 亀裂接着前



鍔部木地亀裂 亀裂接着後